

長野オリンピックがもたらす国際化のアセスメント

信州大学 沢木幹栄

専修大学 永瀬治郎

滋賀大学 備前 徹

研究の目的

近年、日本国内において日本人が日本語を話さない外国人と接触する機会が増え、いやおうなしに外国人とのコミュニケーションをとらなければならない状況に置かれることが多くなった。これを狭い意味で「国際化」と呼ぶことにすると、今後さらに国際化は進むであろうし、国際化を日本語の問題としてとらえ、研究する緊急性が生じてきているとも考えられる。

前回の報告集で述べたように、我々はオリンピックが行われる長野市でオリンピックを境に市民の意識がどう変わるか、言ってみればオリンピック前後で国際化が進展するかを調査することにした。

研究の方法

本年度は、長野市と松本市でそれぞれ400人をサンプリングし、この人たちに調査票を送付した。一週間後に調査員が本人のところに赴き、調査票を回収する。

長野市と一緒に松本市を選んだのは、松本市はオリンピックにはほとんど関係がないし、町の規模も長野市と比べて大きく劣るわけではないので、対照群として適当であると考えたからである。

調査票

調査票の内容は以下の通りである。

言語生活に関するもの（新聞をどれくら

い読むか、テレビの視聴時間など）

マスコミのなかの外国語あるいは外国的な要素に対して抵抗がないかどうか

海外経験の有無

外国人の友人の有無

国内での外国人との接触

外国人・外人に対する意識

外国語能力・コミュニケーション能力

日本語・外国語に対する意見

オリンピックに対する関心の度合

外国文化に対する関心の度合

フェースシート

全部を記入するのには30分程度を要すると考えられる。そのせいか、回収した調査票のなかには、最後まで記入していないものがあつた。

調査の実行

長野市の調査は1996年8月31日から9月6日にかけて行った。

有効サンプリング数399に対して回収できた調査票は322（達成率80.7%）だった。

松本市の調査は1996年10月21日から11月7日にかけて行った。

有効サンプリング数399に対して、回収できた調査票は264（達成率66.1%）だった。

長野市に比べて松本市の達成率が低いのは、いろいろな悪条件が重なったためだが、特に、長野市の調査が合宿形態をとったの

に対して、松本はそうではなかったのが大きい。調査員の主力を占める信州大の学生の地元であることに安心した面があったのかもしれない。

調査結果について

調査の結果については、現在分析中である。

研究の主旨からして、今年度のデータはオリンピック後の調査の結果とつきあわせるべきであり、単年度で見ても仕方がない面があるが、いくつかの項目で長野市と松本市の違いを見ることにしよう。

まず、英会話を習ったことがあるかどうかである。オリンピックが近づけば、長野市では英会話を習った人の比率が上昇する可能性がある。

英会話をならったことがあるか（長野市）

	回答数	パーセント
無回答	20	6.2
ある	93	28.8
ない	206	63.9
わからない	3	9.3

英会話を習ったことがあるか（松本市）

	回答数	パーセント
無回答	18	6.8
ある	85	32.1
ない	159	60.2
わからない	2	0.7

現在のところ、むしろ松本で英会話の学習経験者が多い。

つぎに、オリンピックに対する意識を取り上げる。関心の有無が、オリンピックによって国際化されやすいかどうかを左右するというのが、我々の仮説である。

オリンピックに関心がある

(長野市) (松本市)

	回答数	%	回答数	%
無回答	5	1.5	3	1.1
ある	257	79.8	198	75.0
ない	42	13.0	40	15.1
わからない	18	5.5	23	8.7

松本市民はオリンピックに対して冷淡であるというのが、我々の予想であったが、長野市民に比べて、非常にさめているのかと言うとそうでもない。関心のある人の割合が長野市より松本市の方が低いことは確かであるが。

つぎにオリンピックに対する評価を見るが、これも同様の傾向を示している。

オリンピックは長野県にとってよい催し物か

(長野市) (松本市)

	回答	%	回答	%
無回答	55	17.0	56	21.2
非常によい	78	24.2	57	21.5
ある程度よい	150	46.5	116	43.9
あまり良いとは思わない	27	8.3	24	9.0
全く良いと思わない	3	0.9	2	0.7
わからない	8	2.4	9	3.4